

## ◇実践活動記録

主体的に地域・社会・自然・文化に関わり、地域を大切に思う子供の育成  
～ふるさと水橋のよさ発見！そして発信！～

### 1はじめに

水橋こは、縄文時代の遺跡が残っていたり伝統的な行事がたくさん受け継がれていたり古い歴史があり、また、3世代同居の家庭が多く、地域の人々のつながりが深く人情も厚いなど、たくさんのよさがある。日頃、子供たちはあまりそのよさを意識していないが、地域で学び地域のことを知ると地域のよさが分かってくる。今年度は、特によさを「発信」することを大切にしようと考えた。発信するために子供は、学びを俯瞰してまとめ直す。そのことで、地域のよさをより実感できる。また、地域へ発信し反応が返ってくることで、子供たちが地域への愛着を感じたり、自分への自信を深めたりすることをねらいとした。

### 2 活動の実際

#### (1)地域から学んで発信

##### ①5年生総合的な学習の時間「とやまのくすり・・・」

全国的に有名な「とやまのくすり」。水橋こは昔から「売薬さん」が大勢おられ、今も全国へ出かけておられる。富山の薬の種類や工場の数、売薬の歴史等について調べた後、地域の「売薬さん」から話を聞き、昔と今の違いや仕事の工夫・努力、お客さんの間の信頼関係などの話を聞いた。

#### 〔 地元の売薬さんのお話を聞いて 〕



先に薬を置いてきて、使った分の代金をもらう「先用後利」は、すごいと思います。売薬さんはお客さんを信頼しているんだと思います。お客さんも毎年売薬さんが来るのを待っていてくれると聞いて、びっくりしました。待っていてもらえる売薬さんは、いい人だと思います。

実際に売薬さんの荷物を見たら、思ったより大きくて重そうでびっくりしました。大きな荷物を持って歩くのは大変だと思います。お客さんといろいろな話をしたりお土産をサービスしたり、お客さんのことを考えているからすごいと思いました。



富山の薬について調べた子供たちは、全校、保護者、地域へ学習発表会に劇にして伝えた。台本を決めたり練習したりする中で、自分が伝えたいことが伝わっているか台詞を見直したり、表現方法を考えたりして子供たちは学んだことを再確認していった。

富山の薬を全国に広げた「売薬さん」のすごさをみんなに伝えたい。重い柳行李を担いで全国を歩いて薬を売っていた様子を劇にして伝えたい。

売薬さんが毎年来るのをお客さんが楽しみにしていることを伝えたい。商売だけでなく親戚みたいに仲良くなっていることを知ってほしい。

〔劇の準備を進めるこどもたち〕



売薬の特徴を知ってもらいたい。



江戸時代から富山の薬は有名になった。  
その理由を知らせよう。

劇の準備や練習を進めるにつれ、子供たち自身が富山の薬や売薬への理解を深め、改めてそのすごさを  
知り、自慢に思うようになった。

## ②6年生総合的な学習の時間「ベティ・ロー 青い目の人形」

戦前、アメリカから全国の小学校に友好の印として「青い目の人形」  
が贈られた。しかし、ほとんどの人形が戦争中に壊された。現在富山県  
には6体のみが残っている。本校にはそのうち1体が残されている。  
子供たちにその事実を知らせると「青い目の人形についてもっと知りたい」  
と興味をもち調べ始めた。そして、「どうして水橋西部小の青い目  
の人形は残されたのだろうか」という疑問をもつ子供が増えた。そこで、  
戦争中に本校に通っていた地域の人からその当時のお話を聞いた。



戦争中に、たくさんの小学生が水橋に東京から来てい  
たと知って、びっくりしました。富山大空襲では、とて  
も多くの人が被害に合っていて心が痛みました。

戦争中の生活を聞き、戦争のために人形が壊されるこ  
とになった理由を聞き、戦争は最大の暴力であることが  
心に残りました。もう二度と戦争をしてはいけな  
いと思います。

〔 終戦時、小6だった地域の人から 〕

本校に青い目の人形が残っている理由は、調べても分からなかった。しかし、子供たちは人形を残した  
理由を考えながら、当時、人形を壊した人も残した人もつらかったであろうとその気持ちを想像した。そ  
して、命令には逆らえないような状況の中で、人形を守った水橋の人々を「優しい」「強い」と尊敬する子  
供も出てきた。また、自分たちに人形を残してくれ昔人の思いを引き継ぎ、平和の大切さを伝えたいとい  
う思いが高まり、学習発表会に劇で伝えることになった。

(2) 地域へ向けて発信

① 6年生から発信 「地域のみなさんの健康を願って千羽鶴を届けよう」～地域へ目を向けた子供たち～

今年度は新型コロナウイルス感染症が流行し約2か月間学校が臨時休業となった。

そこで、6年生から「みんなが健康に過ごせるように、千羽鶴を折ろう」と



【リモートで6年生が呼びかけ】



【1年生も真剣に】

全校へ提案した。その結果、全学年から集まった千羽鶴は2000羽以上になった。予想以上にたくさんの鶴が集まり、全校児童の真剣な思いを感じた6年生は、その鶴をどこに飾るか悩み始めた。話し合いを進めていくうちに「みんな」の範囲が「学校」から徐々に「校区」へ広がった。そして、いくつもの案が出てきた。主な場所としては以下の通りである。

| 候補の場所  | 子供たちの考え                                |
|--------|--|
| 水橋駅    | 多くの人が利用するからぴったり。でも、たくさんの人が来るから邪魔になるかも。 |
| 地区センター | 水橋西部の人が利用する。でも、あまり行かない。                |
| 野村病院   | 今も病気の人がいるから渡したい。でも、菌を持ち込んだら迷惑をかける。     |
| しおんの家  | 4年生の時に優しくしてもらったから、ずっと元気でいてほしい。         |



子供たちは様々な観点から悩んだ結果、千羽鶴を届けるのは「しおんの家」に決めた。「しおんの家」は、地域にある高齢者施設で、毎年4年生が交流している。

6年生も、4年生の時にとっても優しくしてもらった経験がある。そのときの優しくったおじいさんやおばあさんたち

にずっと元気でいて欲しいとの思いが根底にあったようだ。

6年生の代表が「しおんの家」へ千羽鶴を届けると大変喜ばれ、それを全校へ伝えると喜んだ。6年生は自分たち活動が多くの人の喜びにつながったことで、満足感や自己有用感を味わった。そのことが自信となり、その後の委員会活動等を積極的に行う原動力になったかもしれない。



### 水橋西部小学校のみなさ～ん!

皆さんからの、思いのこもった「千羽鶴をありがとうございます。新型コロナウイルス感染症対策で、皆さんの学校生活にも、大きな影響の出ている中で、おしいちゃんはおぢちゃんのお慶を届けて、一羽一羽折ってくれたことと感謝し、ありがとうございます。」




「あけっ、うれしいねえ!」

「みんな、元気でね!」




2020年6月 しおんの家のみんなより

【しおんの家からのお礼状】

② 運営委員会から発信 「あいさつの輪を広げよう」～地域を巻き込んで～

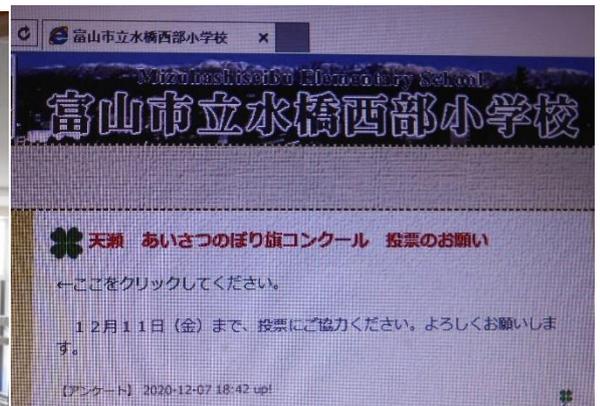
あいさつの大切さは誰でも分かっている。本校でも運営委員会の子供たちが、毎朝、校門や児童玄関であいさつ運動をしている。しかし、あいさつする子供は固定化しており、そんな現状を何とかしたいと運営委員は思い始めた。「校内だけでなく地域の人にもあいさつができる学校にしたい。明るいあいさつの響く学校にしたい」と願った運営委員が考えたのが「あいさつの旗作り」である。

そこで、全校児童へ「みんながあいさつしたくなるような旗を考えてください」と呼びかけた。すると、1年生から6年生まで多くの人が応募した。運営委員で15点に絞り、全校で投票した。

また、地域にもあいさつを広めるために、HPで保護者や地域の人にも投票してもらうことにした。1週間足らずの短い期間であったにもかかわらず、保護者や地域からは70票が入った。予想以上の数に、地域の人が学校に関心をもっておられることを感じた。



〔 あいさつ運動 〕



↑〔 HPでお知らせした のぼり旗の投票 〕

←〔 全校児童への呼びかけ 〕

この活動で大切にされたことは3点。

- ・旗のデザインを考えることを通しあいさつへの意識を高める。
- ・自分たちが企画したことやアイデアが実現する喜びを味わえるようにする。
- ・地域も巻き込んだあいさつ運動にする。

地域の方から「どの旗になったの」と聞かれることもあり、関心をもっておられることが伝わってくる。この旗を地域にも置くことで、子供たちのあいさつへの意識を高め、いつでもどこでもあいさつができる子供になれるよう成長を促していきたい。

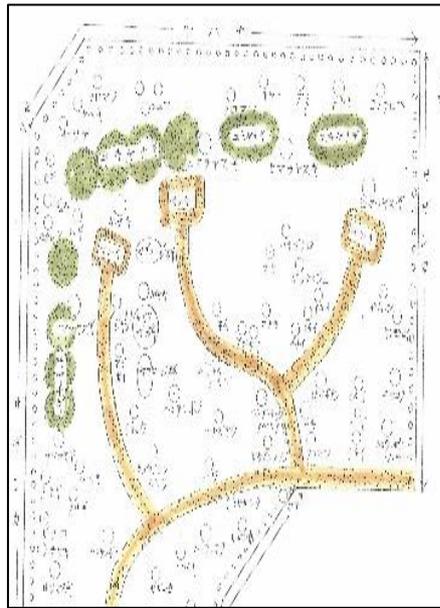


③ 5年生から発信「天瀬の森であそぼう」～先輩（地域の人）の思いを引き継いで～

グラウンドの端に「天瀬の森」を呼ばれる森がある。これは、約30年前に「創校110周年記念」として、その当時の小学生が「みんなに天瀬の森で遊んでほしい」「地域の人にくつろいでほしい」と願って作られた。その当時は木植物だけでなく、地域の人がゆっくり座って、野球の練習を見たり話をしたりできるようなベンチがあった。しかし、今ではそのベンチは見当たらない。



5年生の一人が「天瀬の森をもっと楽しくしたい」と提案し、クラス全体で「天瀬の森改造計画」が始まった。「天瀬の森のことを家で話したら、お父さんが知ってたよ」「やっぱりベンチがあったって」など、天瀬の森を造ったとき小学生だった保護者から話を聞いてきた子供もいた。天瀬の森建設当時の資料も調べ、子供たちは先輩の思いを引き継ぎ「天瀬の森を人が集まる場にしたい」とベンチ作りや遊び場作りを始めた。



【 天瀬の森の地図 】

完成すると各学級への紹介とともに、「天瀬っ子 HP記者」として子供自身が記事を書きHPで地域へも知らせた。願いを実現できたこと、みんなのために活動できたことで自信を得たようで、その後の学校生活にも積極的に取り組む子供が増えた。

天瀬の森 生まれ変わる



5年1組で歴史に残るベンチを作り直した。自分たちでデザインを決め、ベンチで色を塗りました。いろんなデザインのベンチがあるのを見て下さい。他にも、ブランコ等いろいろなものを設置しました。これからも改造する予定です。

天瀬っ子ホームページ（写真撮影・記事作成）

【 子供自ら発信するHP記者 】

3 まとめ

地域の題材を取り上げ地域の人から学ぶことで、子供たちは地域のよさやすてきさに気付くことができた。また、戦争など教科書に載っている出来事も、身近な人が語ってくださることで、自分事としてとらえ、考えることができた。

学んだことを発信することで、子供たちは自分の活動や学習を思い出し、地域の歴史や人のよさを自覚することができた。発信したことに反応が返ってくることで、子供たちは成就感や自己有用感を味わうこともできた。本校では、日頃から「天瀬っ子HP記者」として、発見したこと学習したことを自分で写真に撮り自分の言葉で発信している。多くの保護者や地域の人が楽しみにして読んでくださり、その結果子供たちの様子を理解してくださっている。今年度は、伝統行事も中止となり地域の人とあまり関われなかったため、特に有効であった。学校は子供たちと地域をつなぎ、地域のよさを知り、地域に自信をもつことで地に足を付けて生きていく子供を育てていきたい。